

そして今、私はこの作品の成立が自然発生的なものでなく明確な作者の意識のもとにその才が意図されたという私なりの結論を得たように思う。枕草子は「枕」に始つた。そして作者の成長は次第に深い沈潜の思いを育てた。がその成長は元來物語に發展すべきものではなかつた。人生のある部分に傾かむりした作者は利那しか語りえず、そうした作者にとつて枕草子のこの形は必然のものであつたと考える。

川 辺 世 子

## 「明解古語辞典」と「角川古語辞典」との「あ」に於ける比較研究

- 註 1 岡学燈社  
五十風堂  
『枕草子精読』
- 註 2 目黒書店  
池田亀鑑  
『枕草子に関する論考』
- 註 3 初音書房  
田中重太郎  
『枕冊子本文の研究』
- 註 4 岩波講座  
秋山 虔  
『枕草子』
- 註 5 新潮講座  
窪田空穂  
『枕草子研究』
- 註 6 解釈と鑑賞  
清水好子  
S・34・9 『枕草子の言葉の使い方』
- 註 7 東京堂  
一男  
『源氏物語の基礎的研究』

歴史は流れ、我々人類は膨大な過去になつてゐる。その過去には永久不滅であらうところの古典なるものがある。今日古典読解の爲になす辞書の役割は大きい。多くの単語を或る基準に基づいて整理配列された辞書の性格は非常に複雑である。「一つの言葉の中に日本人のふるさがある。二千年の民族の哀歎が築きあげた古典の数々はすべて私達の心のふるさであつた」とは角川古語辞典の編者のことばであるが、私達は世に誇る古典を数多くうけついでいる。古典によつて、その国の文化がわかるといわれるが、まさしく古典は日本の文化の依り所であると思う。古典は現在に至るまで何ものにも打ち砕けることなくその功績を榮々と輝やかしている。そして時代は常に変遷していくにもかゝらず今後ともずつとその偉大さを残すことである。時代がどんなに変わつても常に新しい意味や解釈を提供してくれるところの古典、その古典の解釈になくて

はならない古語辞典というものについて研究してみたいと思う。ここに三省堂出版の「明解古語辞典」と角川出版の「角川古語辞典」とを比較してみ、あまりにも、その特徴のあることに気づき、この二辞典に於て比較研究してみたいと思うのである。要は明解古語辞典がどのような特色のあるものであるか、又角川古語辞典に於てはどうか、八項目に分類して、その特徴なるものをつきとめてみたいと思うのである。

【但し本稿は「あ」に於けるもののみである】

1. 単語数について
  2. とられていない単語について
  3. とられていない単語を年代別にみて
  4. とられていない単語の重要性からみて
  5. 用例文献の明示されていない単語について
  6. 各単語に於ける用例文献の出典の違いについて
  7. 全用例文献を総合して
  8. 意味の上から比較して
- まず単語数についてみると

明解古語辞典に於ては五一頁で一三五二単語

角川古語辞典に於ては四二頁で一〇二三単語

となつていて明解の方が三二九単語、角川よりも多くとられているのである。外観だけ一目見た時には、このようにも単語数が違うとは思ひもよらなかつたことである。

では単語数が多ければ、それだけで辞書の価値を高く評価することができるのであろうか。次にこの単語の内容についてみてみたい。とられていない単語についてみると、

明解にあつて角川にとられていない単語は四〇六

角川にあつて、明解にとられていない単語は七三

全単語数から言つても明解の方が大部多かつたが、とられていない単語を調べてみても四〇六に対して七三であるから、とられている単語には相当の違いがあることがわかる。ではとられていないということは単語として、それだけとられる重要性がなかつたものであろうか。そして又年代別にみてみたらその特徴もつかめるかと思う。

とられていない単語を年代別にみると、

(明解にあつて角川にない単語) (角川にあつて明解にない単語)

古代(奈良時代) 四八(二二%) 二一(二九%)

中古(平安時代) 六四(二〇%) 二二(三〇%)

中世(鎌倉、室町時代) 七四(二三%) 九(一二%)

近世(江戸時代) 一一一(四一%) 二一(二九%)

となつていて、明解の方に単語数が多いことは前にみた通りであるが、ここで一目瞭然とわかることは明解には近世語が多いということ、一方角川古語辞典には奈良、平安朝の語(ここでは、奈良、平安朝の語を特に古典語と呼ぶ)

が多いことがわかる。古語辞典であれば、古典語が多いということはもちろん重要なことであると思う。その点からみるとしたら、とりあげられている単語数が少ないにしても、角川の方はそれだけの意義があるのではなかるうか。

次にとられていない単語が角川に四〇七、明解の方に七三もある訳だが、これらの単語がとられていないのは重要性のないものであろうか。とられていない単語の重要性をみるため、「大言海」、「新版明解古語辞典」にも同様にとられていないかを調べてみると、明解にあつて角川にない単語四〇六のうちで、

大言海・新版明解古語辞典共にとられているもの二一四  
大言海・新版明解古語辞典共にとられていないものわず

### か三一

大言海・新版明解古語辞典のどちらか一方にとられていないもの一六一

となつて両辞典にとられていない三一を除けば、その他三七五〇語は一応取りあげられる単語として重要なものと考えられるべきであろう。用例文献からしてもそのことが云えるのである。

今度は用例文献のあげ方が明解、角川古語辞典に於てどのようにとり扱われているか比較検討してみようと思う。

用例文献の明示されていない単語についてみると  
明解に用例があつて、角川にないものが一四四

角川に用例があつて、明解にないものが三七

と断然明解の方が用例が多いことがわかる。では一単語に對して用例をもつて解釈されたものがどんなにわかりやすいかみてみよう。例えば「あひす(①かわいがる)」の場合、用例が「こと虫どもを朝夕にあいし給ふ」〔提中納言〕とあることによつて「かわいがる」意味がより深くのみこめるのである。又「あじ(③おもしろい・趣がある)」の場合でも、「峰の松あじなあたりを見出でたり」〔曠野〕という用例で「あじ」の持つ本當の「おもしろさ・趣がある」ことの使い方がわかるように思う。このようにすべての単語に對して用例をあげて解釈されている方が意味がはつきりするし、又その使い方もよく親切な辞典といえるかもしれない。しかし、その用例が本當に良いか悪いか検討してみなければ、その眞の適否をいうことはできないと思う。

次に今度は各単語に於ける用例出典の違いについてみてみようと思う。その出典が古いか新しいかによつて、単語の生存をも知ることができるのである。両辞典に於て単語数も非常に違つたが、各単語に對する用例文献のあげ方も非常に異なつてゐる。

古い文献にて示されているもの  
明解の方 八三

角川の方 一一三  
用例の古いものを挙げてあるということからみると、明解

の方は用例が多いにもかゝらず、角川の方が断然古い方の文献にて示されている。なるだけ古い文献を示すことは辞書の性質上重要な点かと思われる。

次に、両辞典の「あ」に於ける全用例について考えてみたいと思う。

全用例を各年代別にまとめると

|         | (明 解)    | (角 川)    |
|---------|----------|----------|
| 大和時代    | 四七〇(二三%) | 三七八(三七%) |
| 平安時代    | 六七三(三三%) | 二七三(二七%) |
| 鎌倉時代    | 三四八(一七%) | 一四六(二四%) |
| 室町時代    | 一四二(七%)  | 六七(六%)   |
| 江戸時代    | 四一二(二〇%) | 一五九(二六%) |
| 明治・大正時代 | 九(〇%)    | 〇        |

となつて明解の方が単語数も多いかわりに全用例も断然多い。その比はちようど二対一の割合となつている。特に上代と近世とに於てその差は著るしい。大和時代の用例文献で明解の方は四七〇であるのに対し、角川の方は三七八であり、江戸時代では明解の方が四一二で角川の方は一五九となつている。このことから角川の方には古典語が多く明解の方には近世語が多いことがわかるのである。更に、どんな文献に多くとられているかをみると、

|    |       | (明 解) |    | (角 川) |     |
|----|-------|-------|----|-------|-----|
| 21 | 拾遺和歌集 | 一八    | 21 | 土佐日記  | 二二  |
| 20 | 増鏡    | 一九    | 20 | 竹取物語  | 一四  |
| 19 | 新古今集  | 二〇    | 19 | 太平記   | 一五  |
| 18 | 太平記   | 二〇    | 18 | 栄華物語  | 一五  |
| 17 | 川柳    | 二二    | 17 | 更級日記  | 一六  |
| 16 | 竹取物語  | 二六    | 16 | 伊勢物語  | 一六  |
| 15 | 伊勢物語  | 三〇    | 15 | 謡曲    | 一七  |
| 14 | 大鏡    | 三二    | 14 | 宇治拾遺  | 一八  |
| 13 | 狂言    | 三八    | 13 | 川柳    | 一九  |
| 12 | 謡曲    | 三八    | 12 | 狂言    | 一九  |
| 11 | 古事記   | 四〇    | 11 | 宇津保物語 | 二〇  |
| 10 | 浄瑠璃   | 四四    | 10 | 平家物語  | 二四  |
| 9  | 宇治拾遺  | 四七    | 9  | 西鶴    | 二七  |
| 8  | 徒然草   | 五七    | 8  | 古事記   | 二八  |
| 7  | 日本書紀  | 六一    | 7  | 古今和歌集 | 三〇  |
| 6  | 平家物語  | 六四    | 6  | 徒然草   | 三六  |
| 5  | 古今和歌集 | 六九    | 5  | 枕草子   | 四二  |
| 4  | 枕草子   | 九七    | 4  | 日本書紀  | 四七  |
| 3  | 近松    | 一七一   | 3  | 近松    | 七五  |
| 2  | 源氏物語  | 二二四   | 2  | 源氏物語  | 二〇一 |
| 1  | 万葉集   | 三六九   | 1  | 万葉集   | 二九八 |

|    |       |    |    |       |    |
|----|-------|----|----|-------|----|
| 22 | 十返舎一九 | 一八 | 22 | 後撰和歌集 | 一一 |
| 23 | 井原西鶴  | 一八 | 23 | 紫式部日記 | 一〇 |
| 24 | 土佐日記  | 一六 | 24 | 今昔物語  | 一〇 |
| 25 | 後撰和歌集 | 一六 | 25 | 大鏡    | 一〇 |
| 26 | 蜻蛉日記  | 一六 | 26 | 拾遺和歌集 | 九  |
| 27 | 更級日記  | 一四 | 27 | 狭衣物語  | 七  |
| 28 | 栄華物語  | 一四 | 28 | 式亭三馬  | 七  |
| 29 | 方文記   | 一四 | 29 | 新古今集  | 六  |
| 30 | 和名抄   | 一三 | 30 | 浄瑠璃   | 六  |

一応三十番までみたのであるが、若い番号程に用例出典の一致をみることができ。何といつても万葉・源氏・近松と三大文献は両辞典に於て一番多く用例として示されている。その書かれた量も多いだけに、日本の最も偉大なる古典をまさに示しているといえよう。明解古語辞典は角川の方に比して浄瑠璃十番目であるのに対して三十番目、大鏡が十四番目であるのに対して二五番目、新古今が十九番目に對して二九番目とかなり差がある。とにかく用例のあげ方が異なっているのはいうまでもないことである。

最後に意味の点から検討してみた。辞書に於て一番果す役目の大なるものが解釈であると思う。人には各々性格が違つように、この古語辞典を編纂された著者が異なるのであるから意味のとり方も本質的には同じであらうがその表現の仕方には大部特徴があるようである。中でも

(あ) (感)・あいさつ(挨拶)・あいす(愛す)・あいだてなし(形ク)・あいだる(自動下二)・あうよる(奥寄る)・あか(閑伽)・あが(吾が)・あがく(足掻く)・あかし(明かし)・あかなくに(飽かなくに)・あかむ(赤む)・あがる(上がる)・あかれ(別)・あきな(みやうり(商ひ冥利)・あきらけし(明らけし)・あぐ(上ぐ)・あくさう(悪想)・あげさげ(上げ下げ)・あげせん(揚げ銭)・あざける(嘲る)・あさまし(形シク)・あさもよひ(朝催ひ)・あしわけをぶね(葦別小舟)・あそばす(遊ばす)・あそぶ(遊ぶ)・あそみ(朝臣)・あたる(当る)・あぢ(味)・あつ(当つ)・あつかはし(暑かはし)・あづまち(東路)・あつらふ(誂ふ)・あておこなふ(宛て行ふ)・あと(跡)・あながち(強ち)・あなた(彼方)・あはひ(名)・あひ(相)・あひあひ(相合)・あひだ(間)・あひみる(相見る)・あふ(会ふ・合ふ・齋ふ)・あふ(敢ふ)・あふぐ(仰ぐ)・あふさきさるさ(形動ナリ)・あふなあふな(副)・あふひ(葵)・あふる(煽る)・あまし(形ク)・あやなし(形ク)・あやめ(菖蒲)・あらし(現人神)・あらし(顛)・あらし(現す)・あらしとがみ(現人神)・あらし(有る)・あらし(有る)・ありあふ(有る)・ありあけ(有明)・あれ(吾・我)・あれ(彼)・あんど(安堵)・あんべい(安平)

以上六十五単語に於てはとられるべき意味がどちらかの辞典には欠けていることがわかつた。例えば「あいす(愛す)」の場合、明解には「かわいがる」という意味はない。

用例に「この虫どもを朝夕たあいし給ふ」(堤中納言)とあるから、確かに「かわいがる」という意味はあるべきである。同様に「あざける(嘲る)」の場合も明解の方では「声をあげて詩歌を吟ずる」という意味だけしかないが、当然「そしり笑う、あざわらう」の意もあるべきである。

本来「あざける」の意は「そしり笑う・嘲弄する」が語源であると思われる。更級日記に「やすからずおどろきあさみわらひ、あざけるものどもあり」とあるが、之から判断しても、「そしり笑う、あざわらう」でなくてはならない。この「あざわらわれる」原因を晴らす意味から転じて「興じて吟じる」、即ち「声をあげてうたう」等の意が出てきたものであろう。「月にあざける風にあざむく(声をあげて詩歌を詠ずる)ことたえず、花を弄び、鳥をあわれまずと云ふことなし」(後拾遺集・序)とあるが、意味の自動的転化と思われる。このようにしてみてくると、欠けている意味が不思議なくらいである。この六十五単語の中でも、ちよつと考えただけでこんな意味もおちているのかと思うようなものが多い。「あさまし(形シク)」にしても「考えが浅い・浅はかだ」という意が角川にはない。それから又「あし(足)」には銭を意味するものが角川の方に欠け

ている。お金のことをオアシといったのも足故にそう呼ばれたものと思われるから、銭の異名ということも欠けてはならないように思う。それから「あつかはし(暑かはし)」は明解には「暑苦しい」の意だけしかない。が源氏・螢の巻に「姫君は(中略)大殿隠りにけるを宰相の君の御消息伝へに、居ざり入りたるにつけて、いと、あまりあつかはしき御もてなしなり(略)」とあることから「煩わしい、重苦しい」という意もあつてしかるべきであると思ふ。これらの単語はちよつと判断しただけでもその当を得ることができるのである。以上ずつとみたように同じような辞書でありながらずい分違つてゐる。

辞書を編纂するということは龐大な仕事であることはいうまでもない。なみ／＼ならぬ編者のおかげで私達は容易に勉強することができるのであるが、この学問の道はきびしい。そして学問の追求にあつては一部の間違ひも容赦されていけないし、又容赦さるべきものではない。しかし人の力には限界がある。そして時には、誤りをも生ずるのである。果してそれが誤りかどうかわからない場合、次の研究に待つほかはない。

ここには「あ」についてのみしか調べることができなかつたが、八項目によつてみた結果は辞典それ／＼に特徴があるということである。これら両辞典に於て総合的に特徴をまとめてみるならば、明解古語辞典は、単語数が多く、その

解釈の仕方也非常に丁寧で用例も多い。その点細かい所から調べる場合にはこの辞典の果す役割は大きいように思う。又角川古語辞典に於ては単語のあらゆる角度から考慮されて、文献用例なども古いものが多い。要は調べる目的によつて適否を判断すべきだと思ふ。これらの結果より知りうることは、その語の持つ意味、発生過程・変化・転化と追求すればするだけの問題があること、そして一つの辞典が必ずしも完全なものではないということである。

## 附記

ここに揚げたものは、八項目とも資料が必要な訳で、限られた紙面では理解されにくいかと思ふ。参考資料は、論文の方をみて載きたい。

## 源氏物語と植物

### 植物使用の効果

古閑素子

はしがき

本文は、先に提出した卒業論文『源氏物語と植物』を「国文研究」の記事用として、要約したものである。

卒業論文は、先ず物語に現われた全部の植物及び木や草・花等植物関係の言葉の前後の文を摘出し、これに文学面からと植物学上からの考察をなし、それらを資料として、研究の主目的を「登場の植物は、物語にどんな効果を与えているか」に置いて総論を纏めた。しかし、本文は、原稿枚数の制限もある為、資料の分は一切省略し、総論もその一部を省略、或いは削除した。

文中引用する源氏物語の原文は、「日本古典文学大系、源氏物語、一〜五卷」により、原文の所出卷名は、八桐壺のように記し、作者紫式部は、「作者」と略称した。

### ○ 源氏物語の植物

源氏物語五十四帖中に使われている植物は、若菜・竹等のような総合名称や月の桂などの想像のものも含めて百十余种である。(細部の表省略)

この百十余种は、万葉集の約百六十、枕草子の約百四十に比べるとその数は少いが、万葉集に於ては長年月の間に各階層の人々が、植物に関連して、日本全国に於て、見たり、聞いたり、感じたりして千五百余首中に詠みこんだものであり、枕草子のもとは同時代の人の作ではあるが、自然趣味を中心とした随筆であるので、植物の数だけを比較するのは適当でない。

源氏物語における植物は、前記両文献より数こそ少いが